



## 祇園座で弁天小僧を演ず



高松市長

大西 秀人

去る4月29日、昭和の日。香川町東谷「ぎおんざ祇園座」の農村歌舞伎公演に出演しました。祇園座保存会の本公演、地元の小中学生の公演と併せて行われた地元有志公演の一員としての参加です。演目は、白浪五人男として知られる「あおとぞうしはなのにしきえ青砥稿花紅彩画 いなせがわ稲瀬川勢揃いの場」。私はべんてん こぞうきく の すけ弁天小僧菊之助役です。

本番が近づいても十分な練習ができず、緊張感ばかりが高まっていました。でも不思議なもので、当日、化粧を施し、顔書きをして、衣装を着け、刀を差し、高下駄を履くと腹が据わりました。そして本番。最後のポーズを決め、幕が引かれたときには、終わってほっとすると同時に、大事を成し遂げた充実感がありました。名乗りの場面で、襟を掴んで足を投げ出し、見得をきったとき、大勢の観客からいただいた盛大な拍手は大変有り難いものでした。大向こう？から「よ、ひでとや秀人屋」とよくわからない掛け声をかけてもらい、お捻りもたくさん飛んで来て嬉しく思いました。得難い体験をさせていただいたと関係者に感謝しています。

この祇園座農村歌舞伎。始まったのは江戸時代後期で、実に180年以上の歴史を持つとされています。祇園座の名は平清盛の寵愛を受けた白拍子ぎおう祇王と妹ぎにょ祇女が一時麓で隠棲をしていたという言い伝えのあるぎおうやま祇王山を朝夕仰ぎ見る地にあった事からつけられたとされています。時代により盛衰はあるものの、綿々と今日まで歌舞伎公演が続けられ、その熱心な活動が認められて、日本ユネスコ協会連盟から100年後も残したい文化として「プロジェクト未来遺産」の登録を四国で初めて受けています。

香川県には、日本最古の芝居小屋である金丸座でプロが公演を行う金比羅歌舞伎や300年以上の歴史を持つ小豆島肥土山、中山の農村歌舞伎もあります。歌舞伎の語源は、「傾く（かぶく）」の名詞化であり、「常識はずれ」や「異様な風体」を意味する言葉です。言わば前衛芸術なのです。人々を驚かせ、非日常の世界へと連れ込んで楽しませるといふ歌舞伎の魅力の本質を失わず、それぞれの特徴を生かしながら、この貴重な地域資源を後世にきちんと伝え残していく事が大切である、との思いを強くしました。